

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

<火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）が継続>

口永良部島では21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の多い状態が続いています。火山活動が高まった状態となっているため、今後の活動状況に注意が必要です。

### 【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況（図1～6）

口永良部島では21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しており、本日（28日）も多い状態が続いています。新岳西側山麓付近の火山性地震や火山性微動は観測されていません。また、これまでの活動と比較して規模の大きな火山性地震についても観測されていません。

16日に実施した赤外熱映像装置による観測では、新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の噴煙や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、少ない状態で推移しています。24日の観測では1日あたり60トンで、21日以降の火山性地震の増加に伴う火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加傾向は認められません。

GNSS連続観測では、島内の基線の伸びは2020年5月頃から停滞していましたが、一部の基線でわずかな伸びの傾向がみられます。

なお、天候の回復を待って、気象庁機動調査班（JMA-MOT）による現地調査を実施する予定です。

---

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.data.jma.go.jp/fukuoka/index.html>）や気象庁ホームページ（[https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)）でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

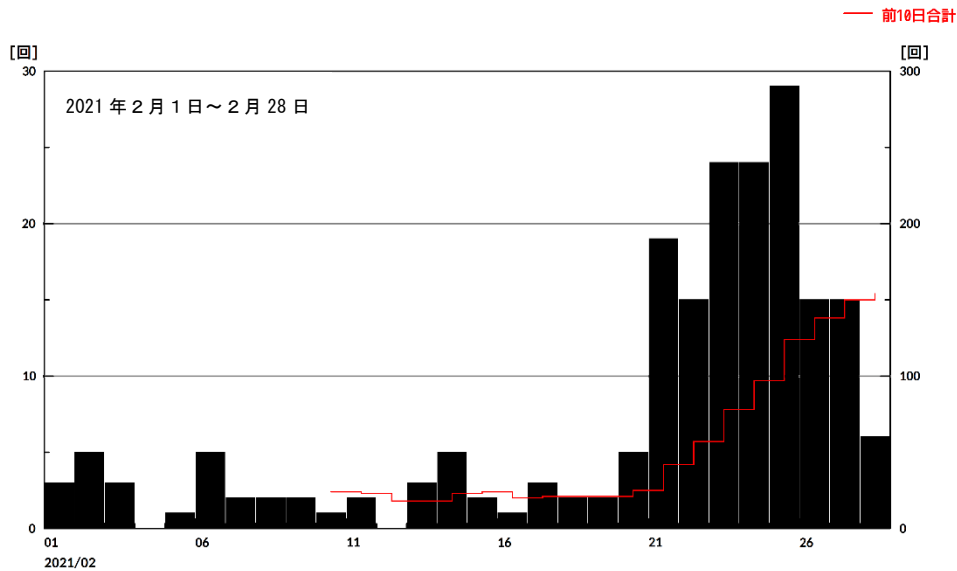


図1 口永良部島 火山性地震の日別地震回数と前10日間の積算回数（2021年2月1日～2月28日09時速報値）

21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しており、本日（28日）も多い状態が続いています。

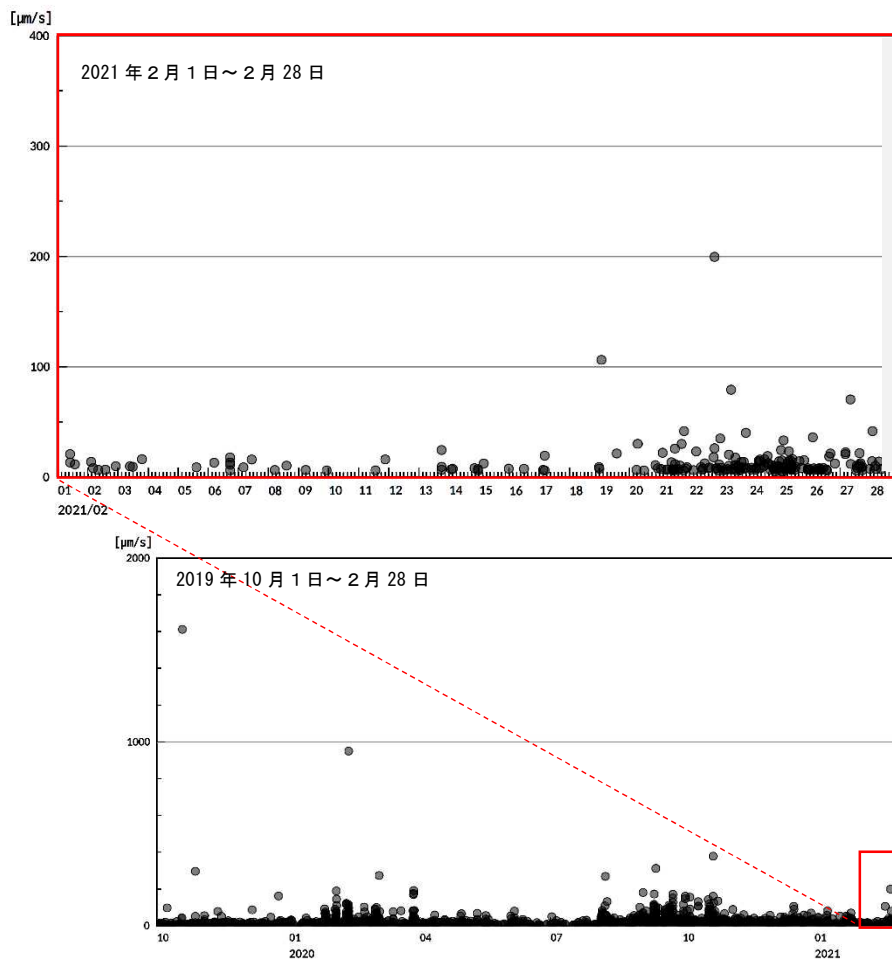


図2 口永良部島 火山性地震の最大振幅（FDKL（京）観測点の上下動、上：2021年2月1日～2月28日09時速報値、下：2019年10月1日～2月28日09時速報値）

21日以降、これまでの活動と比較して規模の大きな火山性地震は観測されていません。

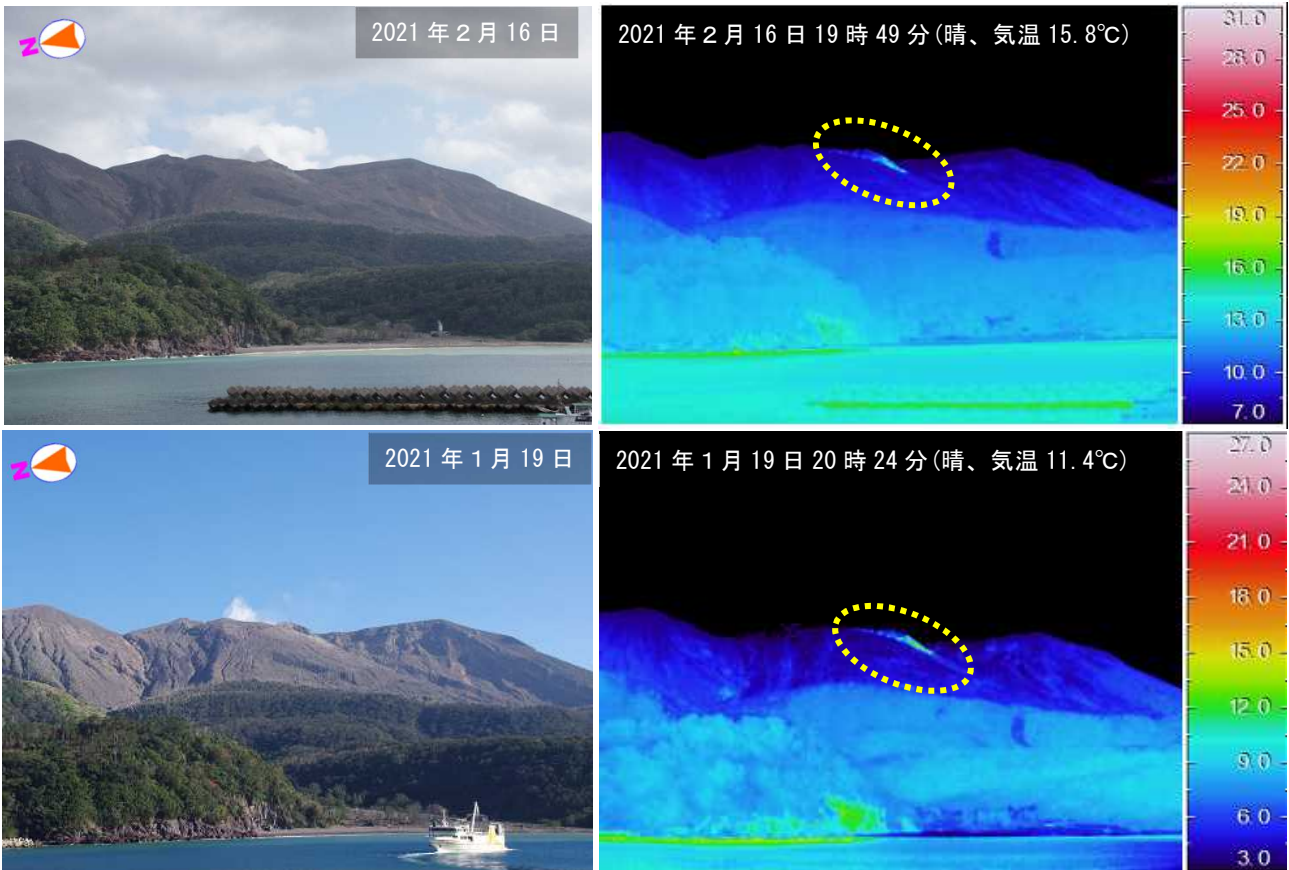


図3-1 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

16日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において、引き続き、新岳火口西側の割れ目付近の地熱域（黄破線内）を確認しました。地熱域の温度と分布には特段の変化は認められません。

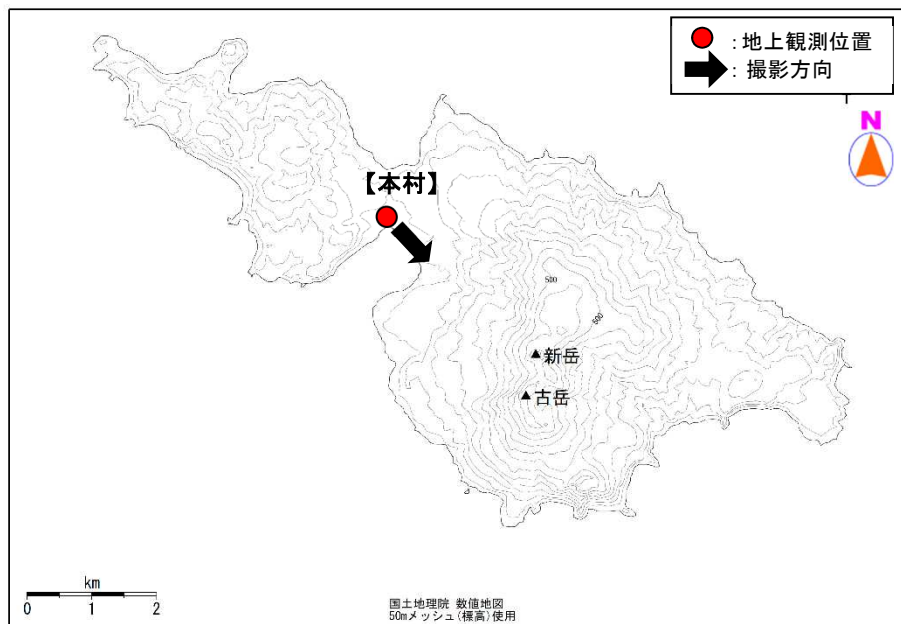


図3-2 口永良部島 現地調査観測位置及び撮影方向

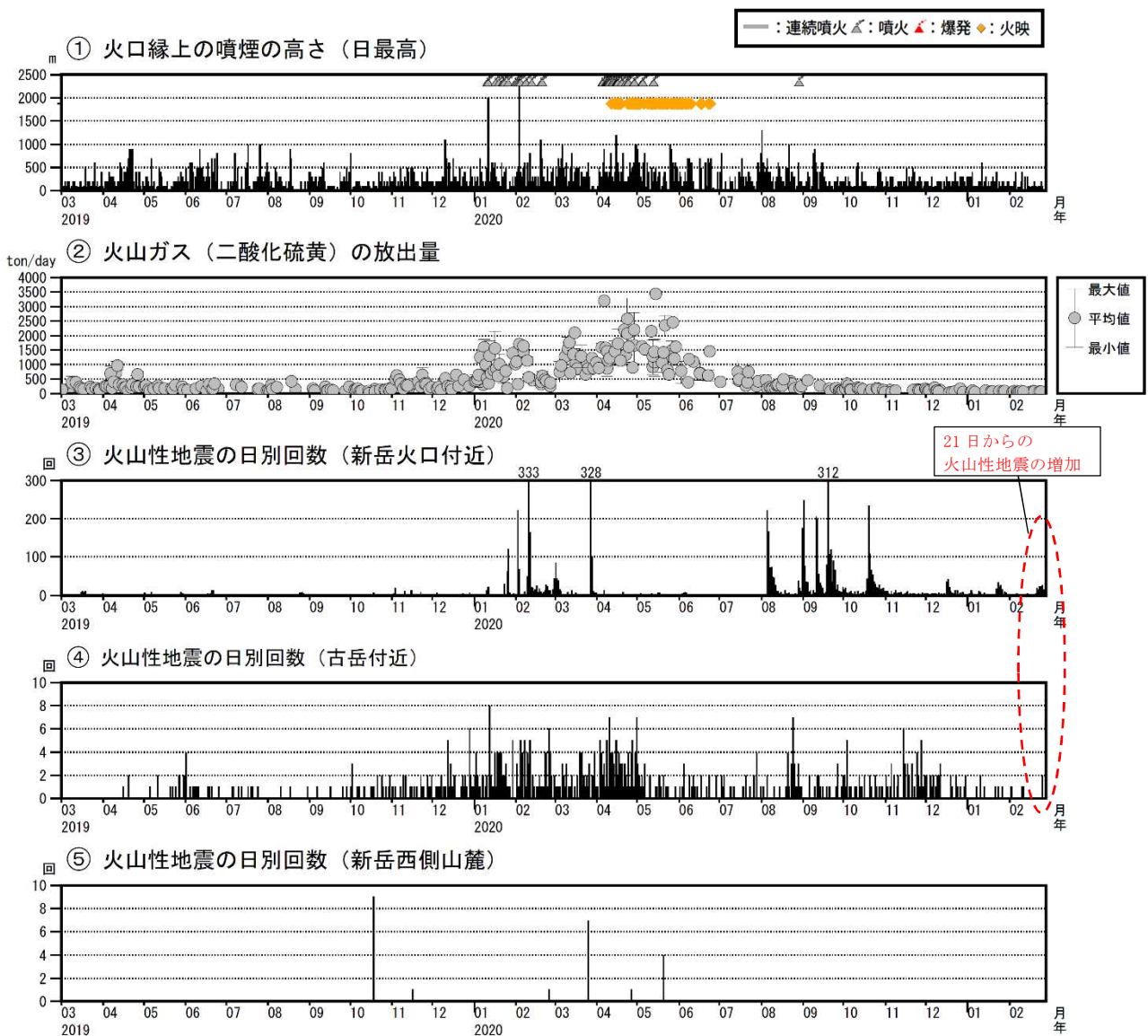


図4 口永良部島 活動経過図（2019年3月～2021年2月27日）

- ・噴火は2020年8月30日以降観測されていません。
- ・火映は2020年6月25日以降観測されていません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、少ない状態で推移しています（24日：1日あたり60トン）。
- ・21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しており、本日（28日）も多い状態が続いています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は2020年6月以降、観測されていません。



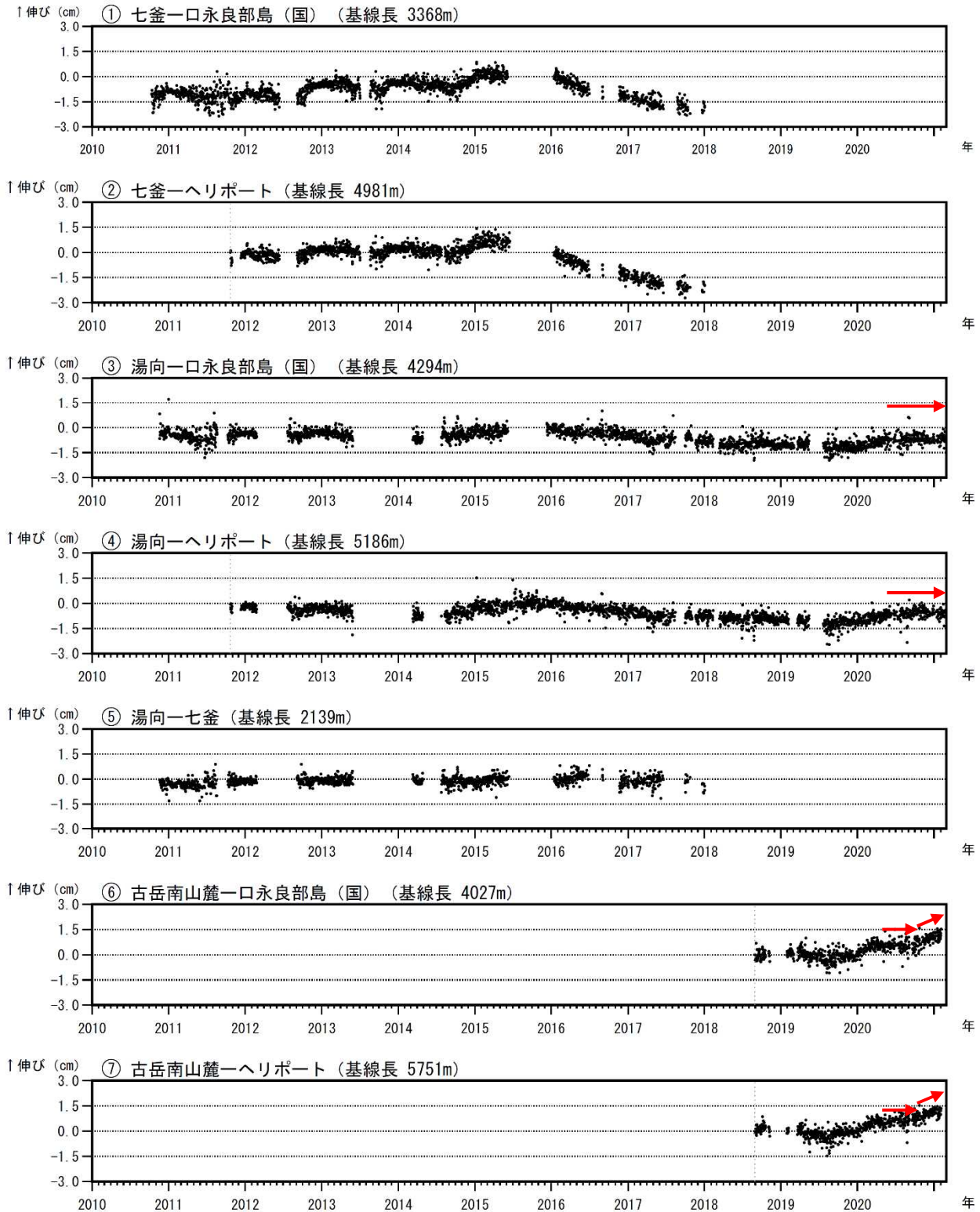


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010年10月~2021年2月27日)

GNSS 連続観測では、島内の基線の伸びは2020年5月頃から停滞していましたが、一部の基線でわずかな伸びの傾向がみられます。

これらの基線は図6の①~⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

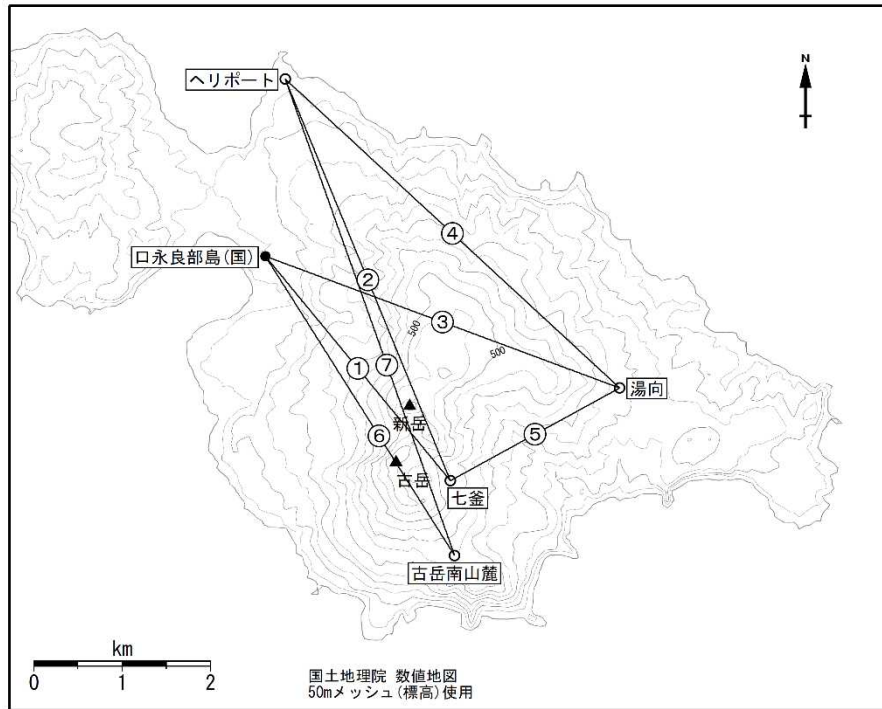


図6 口永良部島 GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国)：国土地理院

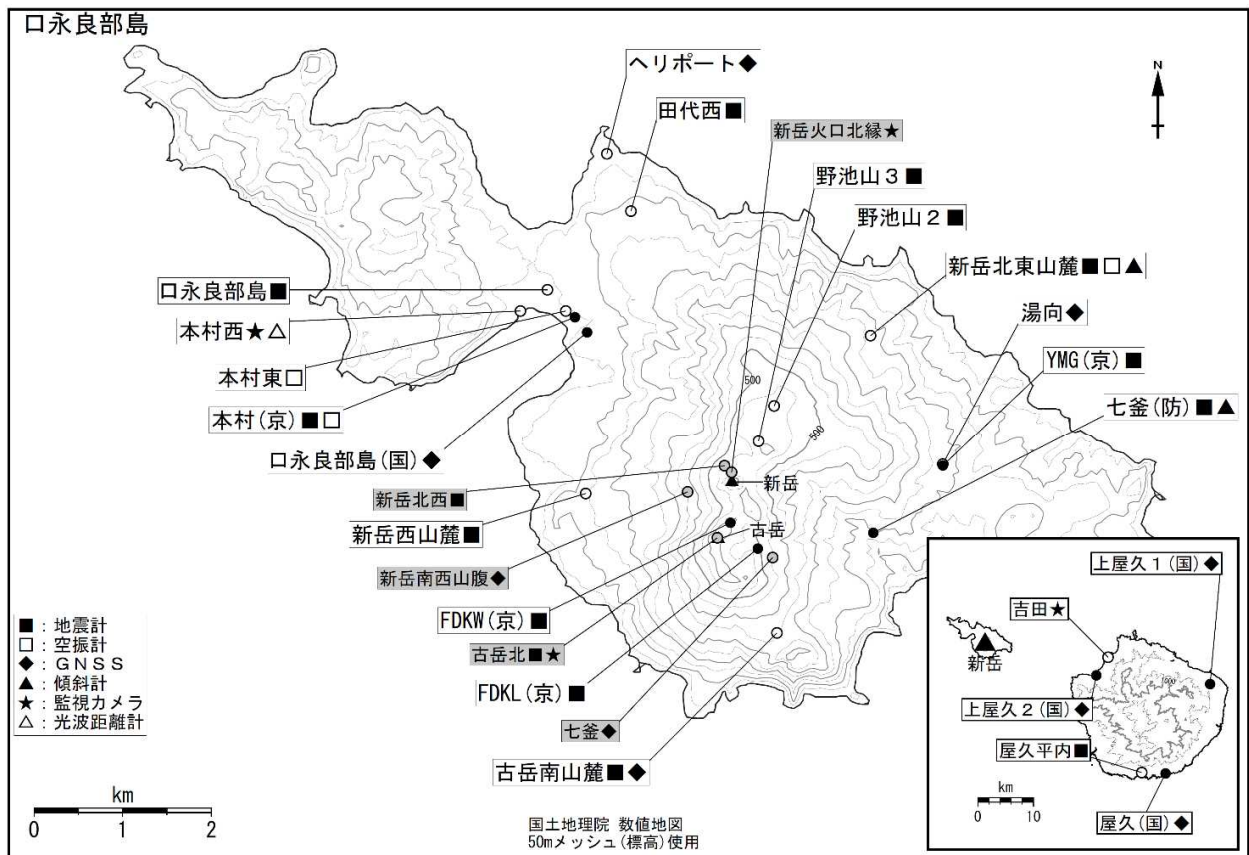


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。